巻頭言

翻訳のない世界

名古屋大学　国際教育交流センター長
長　畑　明　利

テジュ・コールというナイジェリア系アメリカ人作家は，ある講演で，自分の作品は幸運にも多くの言語に翻訳されたため，私は今やそれぞれの国の言語の著者になった，と述べている。彼はさらに，ハイチ系カナダ人でフランス語で執筆するダニー・ラフェリエールという作家の言葉を引用し，彼の「日本人の読者が私の本［日本語訳］を読むとき，私はただちに日本の作家になるのだ」という言葉も紹介している（Teju Cole, “Carrying a Single Life: On Literature and Translation,” *NYR Daily* [*The New York Review of Books*], July 5, 2019）。翻訳は，原書を読めない人が，その人に理解できる言語でそれを読むことを可能にする。だから，作品を翻訳で読む人にとって，原書が何語で書かれていても，その作家は翻訳語の作家（日本語に翻訳されたら日本もしくは日本語の作家）と同じだというわけである。

翻訳で読まれるからといって，原著者が翻訳された言葉の作家になると言うのは，もちろん，奇をてらった，挑発的な物言いである。むしろそれは，文学が国籍や言語の壁を越えうるものだという考えを反映する発言と解しうる。文学の世界では，昨今，「世界文学」という視点に立つ文学作品への取り組みが盛んになっている。それは，国や民族の制約から自由になった文学を意味し，その構想はゲーテの時代から語られてきた。しかし，国境を越えた移動が盛んになった現代では，複数の国や地域を出自とする作家，あるいは，複数言語を使用する作家も多く，彼らを一つの国や地域の作家として限定することは困難になってきている。自分は翻訳された国の言語の著者になると言う作家の言葉は，こうした国籍や言語の越境状況を踏まえた，現代の世界文学的視点を反映するものであろう。（また，その言葉は，文学の領域に留まらず，様々な理由で国境を越えようとする人を，同じ人間として受け入れることを促す姿勢を示すものでもある。上記の講演の後半で，コールは，アフリカからイタリアへ渡ろうとして遭難の危険に直面していた人々を，自分の船で救った船長について触れている。）

しかし，その一方で，外国語で書かれた本を翻訳の言葉で読むのなら，その本は翻訳された言語で書かれた本にほかならず，もともとその言語で書かれた本と変わらないとする発言は，文学作品の受容において，また一般社会において，翻訳の重要性がますます大きくなっている状況を浮き彫りにするものにも思われる。とりわけ，「翻訳大国」と言われる日本においては，外国語で書かれた本を読む際に，翻訳に頼る度合いが高いと考えられ，この言葉はその状況と符合する。実際，学校教育において英語や第二外国語（初習外国語）を学んだとしても，十分な習熟度に到達しない限り，外国語の書物や文献を原語で読むことはたやすくないし，日本では，仕事で必要とされる場合をのぞき，外国語の文章を読む人の数は必ずしも多くないだろう。また，外国語の書き手の文章を日本語で読むことが自然であると感じる人は，近年さらに増えているように思われる。かつては字幕で見ることが一般的であった外国映画も，今は日本語吹き替え版の方が人気であるという話も聞く。外国文化の受容において，外国語の要素が極力排除されているかのようである。

今後，国内における翻訳環境は技術革新によってさらに充実したものになるだろう。書籍の翻訳とまではいかないまでも，オンラインの翻訳サービスの精度は向上しつつあり，スマートフォンのカメラで文字列を捉えると，画面上で外国語に翻訳してくれるアプリも使われるようになってきた。母語での発話を拾って外国語に翻訳し，発話してくれるアプリもあるという。こうしたサービスは，海外で買い物をしたり，レストランのメニューを読むときなどに便利であろう。しかし，翻訳環境の充実が便利であることは疑いえないものの，その環境に過度に依存することには警戒が必要である。日本語を母語としない人と本格的なやりとりをする際には，翻訳や通訳アプリにばかり頼るわけにはいかないからである。

留学はそのよい例である。留学先では原則的に日本語は通用せず，現地の言葉，あるいは，日本語母語話者にとっては外国語である英語を用いて勉強しなければならない。教科書をはじめ，授業で用いられる文献も日本語ではないだろうし，講義を聴いて理解すること，発表し，質問し，議論に加わること，レポートや論文を書くことも，日本語で行うわけにはいかない。日本語母語話者にとって，留学するということは，依然として，翻訳のない世界に足を踏み入れることなのである。近い将来，通訳アプリを使って英語の講義を日本語として聴き，発表し，翻訳アプリを用いてレポートや論文を書くということが可能になるかもしれない。しかし，現時点ではそれは困難であるし，そもそも，通訳アプリを使って議論に参加することは可能だろうか？

留学を目指すのであれば，少なくとも当面の間は，これまで同様，地道に語学学習に取り組むことが必要である。実際，留学生の受け入れに際して，一定レベルの語学能力を条件としている大学は依然として多い。また，本学においても，留学を目指す学生諸君は，準備として語学学習に熱心に取り組んでいる。留学によって翻訳のない世界を経験することは，その後の人生やキャリアにおいて，通訳アプリ，翻訳アプリを使えない状況に対処するうえで役立つことだろう。翻訳・通訳に頼ることなく勉強し，生活するための準備を進めてもらえればと思う。